

津田昇平教話 第七三話

令和三年三月十四日 朝の教話



人間はみな天地金乃神様から人体を受け、御  
霊を分けていただき、日々天地の調べてくだ  
さる五穀をいただき命をつないでいる。

おはようございます。令和三年三月十四日の朝をお迎えさせて頂くことができました。

昨日までは、祈いのれ薬ぐすりれというお話から、御神米ごしんまい様の話、御神酒おみき様の話、御神水ごしんすい、御神飯ごしんばん、こういった、神様にお供えをさせて頂いて、神様のお徳を込めて頂いて、そういった、神様からお下げ頂いている御物おもものを頂くというほど、このほどについて、お話をさせて頂きました。こちらの心一つで、神様の御物にもなるし、それをありがたく頂く心がなければ、ご無礼になることも多々あるし、心一つであるという、そのようなお話をさせて頂きました。

今日からは、れいさい霊祭も近づいて参りますんで、生と死について、お話を  
させて頂こうかと思えます。

土曜日が霊祭で、翌日ほげんさいが墓前祭になります。御霊様みたまのお祭りをお仕え  
するにあたって、それぞれのような心でお迎えさせて頂くのがよいの  
か、何のために御霊様のお祭りを大事にするのか、それはどういこと  
を意味するのか、こういったことについて、少しずつでもお話ができた  
らなと思えます。

じゃあ、死というもの、亡くなった人を今度お祀りまつりするといこと、  
いこのお話をしようと思いましたが、どうしても、そもそも生きるとい  
うことやら、生まれるといこと、生と死というものがくっついてるも

んですから、死だけを抜き出してっていうことは、ちょっと難しいんですよね。教祖様のご理解を読ませて頂くと、お参りの方に、生と死とご理解下さる時は、ほんとにね、多くの場合、生を説けば、そのあと必ず死を説くし、死を説くときには必ずやはりその前に生を説いてるし、生だけ説く、死だけ説くというのは、案外少ないんですよね。生を説けば死も説く。もうそれは生死一如といつことなんだろつと思ひますけれども。

まずは、生といつこと。命を授かるといつこと。また、授かってから、この世に生まれて、生きるといつこと。いかにしてのみ教えて、まず、お話をさせてもらおうと思ひます。

人間はみな天地てんちかねのかみ金乃神様から人体を受け、御霊みたまを分け  
ていただき、日々天地の調べてくださる五穀をいただ  
いて命をつないでいる。昔から、天は父なり、地は母な  
りというであろう。天地金乃神様は人間の親様である。  
此方このかたの信心をする者は、一生死なぬ父母に巡り会い、お  
かげを受けていくのである。

一理Ⅱ 福嶋儀兵衛 二より抜粋

有名なみ教えの一つだと思えます。捉とえるところはもういくつもあ

んですけれども、今日は生と死ということについてお話をしようと思っております。思いますんで、そこにクローズアップしようと思っております。

「人間はみな天地てんちかねのかみ金乃神様から人体を受け、御みたま霊を分けていただき」というところがありますね。「日々天地の整えてくださる五穀をいただいて命をつないでいただいている」「ここで生の話が出てますね。命を授かるということと、生まれてから生きるということ、この二つのことを教えて下さってますね。」

天と地というものがある。で、天から御霊、地から肉体を分けて頂くんですね。そうすると、肉体に御霊が入ります。そして初めてこう、生きると言いますかね、生命体がそこで出来上がるわけです。これは、生命



体です。これ、肉体だけで、御霊が入ってなかったら、これもう生きるということができないですよ。ま、電池が入ってないおもちゃみたいなもんで、全く動かなくなります。御霊が入るということで、命の活動を進めることができる。ま、そうなるわけですね。

「人体を受けて」とありますね。これ他に、いくつか言い方があるんです。

みんな、天地の神様の分け御霊わたたまを授けてもらい、肉体をあた与えてもらって、この世へ生まれて来ているのであろう。

一理Ⅱ 佐藤光治郎 二九より抜粋

こういうご理解もありますね。この後、死についても一言入ってくるんですけども、「天地の神様の分け御霊わかみたまを授けてもらい、肉体を与えあたてもらって、この世へ生まれて来ている」、ここで分け御霊って言葉が出てきますね。あと肉体。先ほどは、人体。ま、同じことやと思います。そしてこの世に生まれることができているってことですね。

違うみ教えで、また読んでみましょう。

みな、天地の神様の氏子うじこである。それで、体へ魂たましいを下げてくださいってあるから、この世で生きているのである。

袋ふくろを縫ぬって、中が空では何にもならない。袋の中へ物を入れるように、魂たましいをお与あたえくださっている。

〔理Ⅱ 佐藤光治郎 一五より抜粋〕

ここでは、「体へ魂たましいを下げてくださいってあるから、この世で生きているのである」とありますね。肉体、人体、体。ま、おなじことですね。魂たましい、御霊みたま、分け御霊わ みたま。これも、おなじことです。天から御霊、地から肉体、人体を分けて頂いている、いうことですね。

で、「袋ふくろを縫ぬって、中が空では何にもならない。袋の中へ物を入れるように、魂たましいをお与あたえ下さっている」。先ほどの、おもちゃの話と一緒に

思います。当時は、電池で動くということもない時代でしたから。です  
んで、ラジコンのね、おもちゃみたいに電池を入れていうふうにはいき  
ませんので、教祖様として分かりやすいようにと思って、こういう例え  
を仰ったんだろうと思いますけれども。まあ今は電池というものがあり  
ますんで、その方が、例えとしてはよく理解しやすいかもしれませんね。  
じゃあ、違うみ教え、また読んでみましょうか。

たましい  
魂は天地の神様からお下げくださった身であるから

〔理Ⅱ 柏原かしわばらとく五より抜粋〕

っていろいろな表現がありますね。いつからすぐ後にも、この前にも、死の話について出てるんですね。

今、ここまで読ませて頂いて、生まれるということと、生きるということと、どちらも漢字で書いたら、「生」という字が入ってきますね。生まれるということと、死ぬということと、で、死ぬということと。生死と言いますが、まあ三段階あるんじゃないかね。生まれるというその時と、生きてるという時間と、そして、生が終わり、死を迎えるということと。

で、そもそも、生まれるという事は、人体、肉体を分けて頂いて、分けて頂いたところから、そこに御霊を、みたまたましいを込めて頂いて、そし

て生きるということができる状態にして、そしてこの世に生まれてくるわけですね。

じゃあ、死というものについても、簡単にちよっとご紹介しましょうか。その前に一つ、今は生まれるということについてですけども、生まれて、生きるということについてですね。

人間は小天地しょうてんちで、自分の頭をいつも天地の神様がお守り  
くだされてあるゆえに、自分の体を思うように使われる  
のである。

〔理Ⅰ 山本定次郎やまもとさだじろう 二より抜粋〕

というご理解もありますね。

ここで、小天地こてんちという言葉が出てきましたけれども、人間のことを、あるいは人間だけじゃないんでしようけれども、生きとし生けるものというものは皆、肉体と、分け御霊わかみたまを与えて頂いてるはずなんですよね。

物質だけでは生命ってことは成り立ちません。命を命たらしめる働き、これが、天の働き、御霊の働きになりますんで、だから人間も、とりわけその中でも人間のことで考えましたら、人間は、地から肉体、天から御霊を分けて頂く。これで人間の命って考えたら、天と地の、天の属性てんしゆせきと地の属性が重なってるわけですよ。天から御霊、地から肉体、これで

一つの生命体ができる。だから小天地である、と。

じゃあ大天地だいてんちはっていうと、この天地、万物ばんぶつ、宇宙、自然、これ全体で

すよね。それが、大天地と表現されたり、その大天地から、御霊と肉体を分けて頂いて、それを込めて頂いて、一つの生命体として、これが小天地である。大天地が生き通しであるから、小天地も生きることができる。

そういう意味じゃ、繋がつながってるんですよね。

だから、「自分の頭をいつも天地の神様がお守りくだされてある」ってあるんです。これ、頭だけじゃないですわね。心臓にしてもそうですし、肺にしてもそうですし、足も、呼吸も、指先も、どれも、天地の神様がお守り下さって、触れて下さって、お働き下さってるから、自分の体を思う



ように使うことが出来る。生きるとはなにかが出来る。うつろいよくなるんですね。

これが「生」、生まれるということであり、生きるという事です。必要なものを皆、五穀も全部整えて用意して下さっています。セットして下さってるんですね。

じゃあ今度、死ということについて、少し触れてみましょう。まあ生のみ教えに繋がる人が多いですから、教えを聞いてみてください。

みんな、天地の神様の分け御霊を授けてもらい、肉体を

与<sup>あた</sup>えてもらって、この世へ生まれて来ているのである。  
そうしてみれば、この世を去るのに苦痛難儀<sup>なんぎ</sup>をするのは、  
氏子<sup>うじこ</sup>の心からのことである。

一理Ⅱ 佐藤光治郎 二九より抜粋一

「この世を去るのに、苦痛難儀<sup>なんぎ</sup>をするのは、「この世を去る」ということ、  
ま、死ぬということですね。それに対して、つらいとか苦しいとか怖い  
とかっていうことですね。これはもう、氏子<sup>うじこ</sup>の心からのことに過ぎない  
という。でも、そもそもは、天地の神様から分けて頂いてる肉体と、御霊<sup>みたま</sup>

とがある。で、死ぬというのはどういふことかになってくるんですけども、先ほどの違うみ教え、また読んでみますね。

みな、天地の神様の氏子うじこである。それで、体へ魂たましいを下げてくださいであるから、この世で生きているのである。袋ふくろを縫ぬいって、中が空では何にもならない。袋の中へ物を入れるように、魂たましいをお与えくださっている。(中略)

人が死ねば、ほ、ど、けるのである。土から生じる体であるから、死んで魂たましいが離はなれば、土に帰かえってしまう。

一理Ⅱ 佐藤光治郎 一五より抜粋

「人が死ねば、ほどけるのである」、「ほどけるっていう表現がありますね。肉体とたましいとが結びついている、結ばれている、それがほどけるということなんです。」

「土から生じる体であるから、死んで魂たましいが離れば、土に帰ってしまおう、土ってというのはまあ、天と地と言いましたら、地ということのつね、象徴ですよ。じゃあ、死んで御霊みたまが離れたら、御霊はどこ行くか。どこ行きます？天ですね。天に戻るわけです。天から来たから。肉体はって言ったたら、地から来た。」

まあ土ってというのは、天と地で言ったたら、地の中の非常に象徴的です

ね。土ってというのは、代表例です。ですんで肉体はというと、土に帰る。地に帰るってなってくるわけですね。

ここで面白いのは、「人が死ぬということは、ほどけるといいうことである」「肉体と、魂とがほどける」という表現がありますね。

違つみ教え、またいつてみましょう。

氏子うじこらは、生きている時だけ天地金てんちかね乃神様のかみのお世話になるように思っているが、死んでもお世話にならねばならぬ。たましい魂は天地の神様からお下げくださった身であるから、天からひまお暇が出たら、また天地の神様のおひざもと

に納まって、お世話にならねばならぬものである。体は土から生じたものである。土に納まってお世話にならねばならぬものである。

〔理Ⅱ 柏原かしわばらとく五〕

死んだらどうなるのか。「たましいはこころですよ、体はこころですよ」「って、分けてご説明下さってますね。生まれている時だけお世話になるんじゃないくて、死んでからもお世話になる、とまず仰る。その後、たましいは、次は、体は、って分けて下さってるんですね。もう一回読んでみましょ。

「氏子<sup>うじこ</sup>らは、生きていた時<sup>とき</sup>だけ天地金乃神様<sup>てんちかねのかみ</sup>のお世話になるように思っているが、死んでもお世話にならねばならぬ。魂<sup>たましい</sup>は「まず、たましいの説明ですね。

「魂は天地の神様からお下げくださった身であるから、天からお暇<sup>ひま</sup>が出たら、また天地の神様のおひざもとに納まって、お世話にならねばならぬものである。体は「次は、体。

「体は土から生じたものである。土に納まってお世話にならねばならぬものである」「これごっちもお世話にならんといかん、ってこと仰るんですよね。天のお世話、地のお世話。

今度、死というものについて、かなり詳しく仰っておられます。

死ぬというのは、みな日のもとへ帰るのである。 仏ほとけ（※  
仏教のこと）でいうのも神道でいうのも同じことである。  
魂たましいは生き通しであるが、体は死ぬことがある。体は土  
から生じて、もとの土に帰るが、魂は天からお授けにな  
って、また天へ帰るのである。こういうことは一心の者  
でなければ言わない。

ま、誰にでも言うわけでもないんですよ。



何も証拠しょうこがあつて言うのではない。死ぬしぬというのは、魂と体とが引き分けになるのである。

一理Ⅱ 難波幸なんばこう 一三より抜粋

と**いうふうにして仰つてますね。**

「死ぬしぬというのは、魂たましいと体とが引き分けになるのである」、**だいたい「死ぬ**というのがどういふものですか」と言つた時に、教祖様は二つの言葉がキーワードになつて、「引き分けになる」と**いう言葉と、「ほどける**」**という表現と、**どちらもあると思ひます。

仰ることはおんなじですよ。肉体があつて、たましいがあつて、で

もそれは、天から御霊みたま、地から肉体が出てきた、と。で、一つに重なっている。

死を迎えるというのはどういうことか。一つになっている小天地しょうてんちですね、肉体に魂が宿ってる。これ、くっついてる状態です。でもそれが、引き分けになる。漢字でもうそのままですよ。引いて、分かれる。別々になるってことですね。

ほどけるとも表現される。同じことですね。肉体とたましいがほどける、引き分けになる。じゃあ引き分けになったらどこに行くんか。

御霊はどっから来ました？天ですね。だから、天に戻る。肉体はどっから来ました？地ですね、土ですね。だから、地に戻る、土に戻る。引き

分けになって。

こうして、神様のもとに帰っていく。生きている間は天と地の間で生かされて生きているけれど、じゃあ死んだら、天に戻るし、地に戻るし、やっぱり天と地の、天地のお世話になっている。だから生きている間も、死んでからも、そもそも生まれる時も、みな神様のおかげを頂いているという状態ですね。

生きてる時だけじゃないんです。生まれる時も神様のお世話にならないと、天地のお世話にならないと、生まれることもない。授かるってことですね。

で、生まれてからも、天地のお世話になるし、死んでからも、天地のお

世話になるんです。これを全部まとめると、としもりしの利守志野さんに仰ったご理解になるんですね。

お天道様てんどうのお照らしなさるのもおかげ、雨の降られるのもおかげ、人間はみな、おかげの中に生かされて生きている。人間は、おかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである。

一理Ⅱ としもりしの利守志野 一

「人間はみな、おかげの中に生かされて生きている。人間は、おかげ

の中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである。「これもうちよつと、生と死という言葉で表現していくと、「人間はみな、天地のおかげの中に生み落とされて、生かされて生きている。人間は、天から御みたま霊、地から肉体を分けて頂いて、生まれて、その天地のおかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、そして、死ぬということは、肉体とたましいが離れるから、だから、たましいは天に戻り、肉体は地に戻る。やっぱり、天地のおかげの中で死んでいく」「もう結局そういうことですよね。

「これまあ、例えて言いましたらね、これでお話したらだいたい分かる

と思う。マラソンみたいなもんやと思って頂いていいと思ってるんです。

マラソン。マラソン見たことありますかね。だいたい、スタート地点、競技場ですかね、が多いような気がします。まあ、道路でもあるんですよけど。どこでもいいんですけれども、競技場が一つスタートやとして、ここはまあ、天であり地でありって考えたら、そこからスタートして、競技場を出ますね。競技場出て、一般の道路をずーっとぐるーっと走ると。で、最後、四十二・一九五キロが、マラソンですけども、最後まで、戻ってきますね。競技場の中に戻ってくる。またそれが、競技場が天地やと思ったら、天と地ということになってきますと、そこにまた入ってくるんですよ。

スタート地点というのがまさに天と地、それぞれあります。人生スタートする。走り始める。そしたらもう、天地の間で、小天地こてんちとして生きる。で、ゴール地点はっていうと、また天地に戻っていく。もう出発して、ぐるーっと周って、ほんでまた戻ってくるということなんですね。

スタート地点とゴール地点とは、おんなじ場所を意味しますね。これがまあ、生を受けるっていうこと、授かるってことですね。で、生まれてから生きるっていうこと。そして、生が終わって、死ぬということ。生を終えるっていうこと。これが、一つのモデルになってくる。うーん、これを理解されたらよろしいかと思えます。

まずは、生について、死について、だいたいこれまでもお話してきましたんで、そんなに難しい話をしてとは思わないんですけれども、改めて、生について、死について、まずは理解させて頂くことが大事やなあと思います。

お世話になってるってことは、神様が常に働いて下さってますね。今、生きている私<sup>わたくし</sup>たちがまあこうして、今生きてますよね。お話も聞いてる。これ、皆さんの中に肉体を分けて下さってるんですね。で、御霊<sup>みたま</sup>も分けて下さってるんですね。それをこう、意識して頂きたいです、生きる中で。日々の暮らしの中で。これ意識するだけでも、全然違ってくるんですよ。



自分の外で何かこう動いてると、「ああ生きてる」って感じがするかも  
しれません。でも、自分の中に、肉体とたましいとを分けて頂いている。  
それをどれだけこう、意識してアンテナを張って、自分の内側にね、自  
分の命の中にアンテナを張って、生かされているという感じると、  
それを意識できた分だけ、小天地しょうてんちのことを感じてるんですけど、そこで、  
神様のことが分かってくるんですよ、いろんなことが。

自分の命のことが分かれば、天地の間のこと皆分かって言っても  
過言かごんじゃないと思います。繋つながってるんですよ。大天地だいてんちのことはそん  
なに分からんでも、いよいよ小天地のことが分かれば、大天地のことも  
皆繋がってますから、分かってくるんですよ。

生かされて生きてるっていうことは、天地のお恵みを頂いてますんで、必要なものも全部用意して頂いてね。その天地のお恵みの中で、生かされて、今の今も、私たちは肉体があり、たましいを、分け御霊わたたまを与えて頂いて、皆さんの中にあるわけです。こもってるわけです。これを、信心するってのは、磨みがきなさいってことを仰る。

金光大神こんこうだいじん（※教祖様）の衣服や形におかげはない。金光大神の御霊みたまの働きにおかげがあるのである。

一理Ⅱ 仁科松太郎にしなまつたろう 一より抜粋

っていうふうな「理解もありませんね。」

みたま 御霊を磨みがいていくということ。信心していくということは、御霊を磨

いていくんですね。磨いていくと、そうするとたましいが、磨かれて光を放つようになってきます。これがまあ、「金光きんひかる」ということになってくるんですね。

生きていくことの目的ってというのは、究極的には、本心ほんしんの玉たま、たましいを磨くということだ、ひとつで言ったらそうなるんではないですかね。ま、何十年か生きるにしても、その生きる中で信心することによって、どれだけたましいを磨いて、そして、帰ることができるんか。

死ぬというのは遠くに行くんじゃないかって、帰るだけの話ですから。今、

私たちは出発して、旅に出てるだけの状態でしょ。神様の元からちよつと離れてっちゃ、離れて。でも神様の懐なごみの中なんですけど。

で、死ぬということは、「ただいま」って帰るということですね。今、行ってきます」言うて、行って、まあ何十年かの旅をしてるわけです。

航海に出てるわけです。死ぬということは、「ただいま」って帰る時ですね。その長い航海、まあ長いか短いか、そら捉えとらえようによって何とも言えませんけど、でも人間にとっては長いと思います。もう人生百年ぐらいにもね、なることもありますから。

じゃあその何十年やったとして、その何十年もの航海の中で帰ってきて、どれだけ成長したんかなっていうのを、神様見たいわけですよね。

「いつ何十年も航海してて、なーんも学んでない、これちっとも前進ぜんしんしてへんな。これ、えらいこっちゃなあ…」「って、「弱ったなあ…」「ってならんように。

「そうかあ。長い航海やったろうけど、そん中でいっぱい学ばして頂いたんやなあ。おお、結構な御霊になって、えらいピカピカになって、帰ってきよったなあ。そうか、そうか。ほらあ、ようやったなあ…」「って、褒めてもらえるような、それが何よりのお土産みやげになるわけですよね。

「こんだけあちらで稼かせぎましたんで、これ持ってきましたで」「って、そんなの、いりませんしね。っていうか、あの世に持っていけませんもんね。や、こんな地位ゐゐや名譽なごやって、いや別にそんな、位ゐゐとかも、もう

関係ないしね。

どれだけ御霊を磨いて、天地の間を旅をさせて、その中で、天の恵みや地の恵みをちゃんと感じとって、天地の道理てんち とうり、天地のリズムを感じながら、ちゃんと生きて、天地のお恵みを身一杯に受けることができ、しっかりとおかげ頂いて、ありがたいなあという心で幸せになってくれて、さらにはその航海の中で、受けたおかげを人に話して、真まことの道を伝える。そのお手伝い、人を助けるお手伝いまでさしてもろうてるか。それぐらいまでできたら結構ですよね。

そして、いろんなことさしてもらったり、できることさしてもろうて、で、「ただいま」ってようやく、港みなとに着いた。天は父なり、地は母なり。

「ああ、お父さん、お母さんただいま」って。「見守ってくれてたんやろ  
うけど、こんなんであんなんで、こんなおかげで」「どれどれ、ちょっと  
見してもらおうか」って。「お金はもう置いてええわ。位も全部いら  
んわ。うん、はい、じゃあ、本心の玉見せて。たましい見せて。お、よう  
磨かれとるやないか、昇平しやうへいくん頑張がんばったんやなあ」って、言うてもらい  
たい。そのために旅に出してるんですね。だから生きてる間っていろいろ  
は、修行中っちゃ修行中です。ま、冒険ぼうけんしちゃ冒険ぼうけんですよ。

これがほんとにね、神様に、「何学んできたんや、この何十年。何十年、  
必要な分全部与えとったやろうが」言うて。「もう、食べる物から何から

もうぜーんぶ恵んで。これお前のために、親の愛情やないか」と。「神の愛情やないか、これ、分からなかったんか」言うて。「何十年も頂いて、ハアアー、お前は鈍感どんかんやなあ…」、「これじゃ、相済あひすみませんよ。

「や、めづりが深くてああでござうで」とか、「あの人がこんなんで、こんなやから、僕…」、「や、そんなことやない。みんなそれぞれ背負ってるもんがあるにしても、それぞれにちゃんど、セッティングされてるのは分かったるけど、おかげは授けてきてるはずやで」とて。「どこでおかげ、ポトポト落としてきたんや」って。「授けたもの大事にせんかったんかい。いろんな人やらいろんな物を与えてきたやないか。そんな中で、ちゃんど勉強して成長できるように、カリキュラムも組んで、一生考



えてやってきたやないか。証文も書いてるんやから、どんなこと起ころ  
かくらい、分かつとるわい」言つて。「それを、ちゃんと信心もせんと、  
ろくなことせんと、真面目まじめに生きたんかい？だらだらだら勉強机に  
かじりつくだけかじりついて、あれこれ考えて、ちっとも勉強せんかっ  
たんちやうんかい。必要なこと、学べること全部与えてきたのに、教材  
も全部用意したのに、教えてくれる人も用意したのに、お前何を勉強し  
てきたんや、人生で」って。「何を学んできたんや。せんといかん人生の  
学びはどこにやったんや」言つて。…って、叱しかられんようにね。

「よう勉強したなあ、一生懸命しちゅうけんめいなあ。うん、そうか。色々大変やった  
かもしれんけどな、まあまあ人生はそういうもんや。せやけど、皆それ

それに神様からな、必要な学びが、うん、必ずみんな頂けるはずやねんから。信心すれば、みなおかげになるんやからな。そうか、うん。まあしつかりと、おかげ頂いてきたんやな。ええ御霊もみたまととるやないか。来た時はこんなやつたで。それがこんだけ磨みがけたんやからなあ。結構なことなあ。そうか、そうか「言つて。「ああ、そろそろ苦労さん。まあ、ゆつくりしいや」言つて。「こんだけ御霊がキラキラしとんやつたら、まあこうして戻ってきてても、安心やわ」言つて。

そういう御霊様は、帰ってきてても安心でしょうね。せやけど、全然磨かれず、ゴツゴツ、もうピカリともせずだね、曇くもったり、濁にごったりするよ  
うな感じやったら、はあぁー、困ったもんです、これね。

神様も楽しみにして待ってたけど。「肉体はまあまあ、ええわいな」と。  
「生きてる間のことやからな。これがないと信心できひんから与えただけのことや。うーん、で、まあもう、肉体はもういい、もういい。うんうん。はい、いわはご苦労さん。土に帰しておくから、まあそれでええ」って。「御霊はごいしや」と。「御霊、えらいことになったんやないか。なんでこんなんやねん」…って、ならんやないか。

「こんなやつはもうこっちきても、落ち着かんで。御霊が浮かばれん」で「って。「立ち行かんで。何をしてたんや…」って、呆あきれられんように。

神様はおかげをたくさん下さってるんですから、生きてる間にしっか

り信心して、そして、与えて頂いた設定の中で、自分が主人公になって、冒険をして、いろんな困難に立ち向かいながら、神様を杖つえにして、いろんな人に出会い、特に苦しむこと悲しむこともあるやろうけど、そんな中でも、神様のお恵みたくさん頂いて、嬉うれしく楽あしく有あり難がたく生きる道は必ずあるはずだから、そして、人生を全まっうして、できたらやっぱり、受けたおかげを人に話して、真まっの道ちを伝えて、それぐらいまでさしてもらうて、それぐらいまでなるんやったら、天地のありがたいことだって分かってるってことにもなるしなあ。そうやって、「ああ、結構なことちゃ。よう磨こいてきた。えらい、えらい」って。そうやって、お国替くにがえさせてもらう。神様に喜んで頂く。自分も安心する。子孫も立たち行ゆく。先祖も立

行く。…って、なってきましたよね。だから、生きてる間は修行中っちゃ修行中です。

いろんなそれぞれの背景はあるにしても、その日その日、信心の手習てならい、「その日その日は手習いである」「って教えありますけどね。信心ドリルを頂いてますから、もうその日、その時を、今を、神様と一緒に、金光大神様の御取次おんとりつぎ、み教え、お祈り添えいのせを頂きながら、信心の稽古けいこに励む。起こってきた事柄を通じて、そして神様の御心みこころを理解していく。昨日もお話しましたけどね。教話の中で、神様に心を向ける、「しんはわが心、しんは神である。わが心が神に向かうをもって信心と言う」「って言いま

すけど、「神様、神様」って言うのが、これが信心とは限らない。それだけじゃないんです。これは一つありますけどね。それよりも、それは誰でも案外しやすいもんです、困った時ぐらいいは。

大事なのは、神様の御心を、「一体どこにあるのかな。どうすることが神様の御心なかな。神様、私に何を思っ下さってるのかな。どんなことを願っ下さってるのかな。今、喜んで下さるかな。今、悲しんでらっしゃるのかな。嬉しいな、楽しいなって、喜んで楽しんでくれるかな。がっかりさせてへんかな」って、どうすれば、神様が喜ばれるのか、今、神様がどんな御心なのか、それを、「神様の御心はどうなんかな」と思っ、慮おもんばかってていくというじょう。推おしはかっていくというじょう。これが、

自分の心を神様に向けるってことなんです。神様の心、どこにあるかっていうことを自分の心が探たづんねていくってことなんです。それがきちんと分かるってことが、大事なんです。

なんでかって言うたら、神様の御心が分かるってことは、これみな神様が自分に愛情注いで下さってることを分かる、発見するしかないですから。「いやー、神様、めっちゃなんか、内心嫌ないなこと考えてるやん」とかね、そんなんちやいますから。そんなん、神様ちやいますもんね。神様優しいですよ。叱しかられる時もあるかもしれん。でもそれだって、愛情ですよ。父性の愛情です。基本的にはやっぱりかわいいですよ、氏子うじこのこと。皆さんのことが、かわいいんですよ。

で、心を神様に向けるっていうのは、「神様は私のことかわいくてしょうがないんやな」っていうことを、それをいつも忘れずに、「神様そない思ってるんですよ。私、知ってるんですからね」って。「神様、私のことおかげ授けようとはっから思ってるんですよ。私、知ってんねんから」「ああ、こんなことしてしもた。神様、今がっかりしてるでしょ。自分でもがっかりしてるわ」って。「情けないな思ってるでしょ。ああ、そうでしょうね」って。『ああ、いじでっからと頼んでくれよ』って。『神に頼んでくれよ』って、今、神様思ってるでしょ。そやと思っ。今こそ神様にお願いせんともう無理やもん。私立ち行かへんから、もうお願いします」って。



神様の御心を、自分がしっかり推し量って、探って、考えて、で、こういうことやなっていうこと。これ、心を神様に向けてることですね。じやあ神様どんなんかって、それはお取次とりつぎ頂きながら、こうしてお話聞いと分かってくると思いますよ。

生きてる間はそうやって、御取次、み教え、ご祈念きねん頂きながら、わが身わが一家を練習帳、信心ドリルにして、その日、その時、心を神様に向けながら、信心していくんです。お稽古していくんです。

そうすれば、その日その日は手習いですからね、一生懸命やったらやった分だけ、しっかりと成長しますよ。学びがあります。たった一日で大きな学びって、そんなないかもしれません。でもね、長く信心、しっかり

りと毎日心がけてやってたらね、運命変わるんです。いや、一日で変わることはないけどね。せやけど、願って一生懸命信心したらね、運命変えて頂けるんですよ。

だって、教祖様がそうでしょ、あんだけめぐり深くてどうにもならなかったお方やなのね。でも、信心に気がついて、一生懸命信心したら、やっぱりそれだけの深いめぐりを、高い徳に変えてもらってんですから。

で、教祖様だけっていうんじゃないかって、「自分はおかげの受けはじめて、みんな誰でもおかげ頂けるんや」って、言うて下さってる。まあ実際そうなんですよ。皆さんが、そうなんです。今どんなに大変なところがあるとか、今苦労していることがあると思っても、信心すれば、必ずお

げは頂けるんです。だから、信心させてもらわんとあきませんね。

でも、自分の都合のいいことばかりお願いするのは、これは身勝手な信心ですよ。ま、神様に心を向けるのは、一つの基本ですけどね。でも、天地の道理てんち どうりに合っていないことをいくらお願いしてもいかんし。だって、何のためにこの世に生まれてきたんか。自分が好き勝手に生きるために、そんなんやってたらみんな不幸にしかありませんわ。天地の道理に沿って生きるということを、覚えていかんといけません。それがちゃんと自分の願いが、神様の願いとピタッと合うようになったら、そら願うことなんでも、天地の間のこと、ほんま自由になると思いますよ。

三代金光様やったかなあ、「天地の間のこと自由になる」って仰って、それだけ神様の願いと自分の願いとが、ピタッて合うんですもん。それはなんでもおかげ頂きますよ。思うように願いが叶かなってないっていうことは、神様の御心と自分の心とが重なってないってことですよ。一部しか重なってないからですよ。願うことが何でもおかげになるということは、自分の願ってることと、神様が願ってることがピタッて合ってるからってことです。だから、おかげになるんですよ。

六根清浄ろくこんじやうじやうの祓はらいにもね、最後の方に出てくる言葉で、「為なす所ところの願ねがいとして成就じゆうじゆせずということなし」って言葉があるんです。自分がほんとは信心して、神様の子としてね、信心して、御霊ごたまがしっかりと磨かれ

ていったらもう、天地のしんと同根どうこんなり。天地の神様と、しっかりと繋つながって、ピタッてくっついてね、根っこでもくっついてる、同根である。そうになったら、「為す所の願いとして成就せずということなし」って。

そこには、「万物ばんぶつの霊れいと同体なり」ってという言葉も出てくるんです。「万物の霊と同体なり」万物の霊は御霊みたまですね。同体である、もう繋つながってるんです。天で全部が溶け合ってる状態になる。だから、「為す所の願いとして成就せずということなし」っていう、そういう世界になってくる。

これ三代様、「天地の間のごことはみな自由になる」って仰ってるでしょ？で、そうなるにはどうしたらいいかって、神様の御心と、願いと、自分の願ってというのが、ずれてるようではこれ、無理なわけですよ。同

体になってないし、同根になってないし。

だから、生きてる間は、なんで生きとるんか。なんで生かされてるんか。なんで肉体を与えてもらっとんか。肉体は何のためにあるんか？

信心するためですよ。肉体がないと信心はできません。肉体がないと信心できない。死んでからは信心できませんよ、肉体がないから。じゃあもう、せいせい祈られて救われるかどうかぐらいしかできないですよ。

自分で信心して救われるというチャンスは、ノーチャンスですよ。それ、生きてるからできるんです。死んだらどうなるか。もう誰かに祈ってもらうししょうがないですよ。でも、それだってどれだけ期待できるか

どうか。だから、生きてる間にしっかりと、おかげ頂かんとあかんの  
です。

お国替えした時に、「ただいま」って帰った時に、「おお、よう磨いた  
な。これ大変やったんちゃうか、これ」って。「あれ、だいぶ汚れてる部  
分もあったかもしれんけど、よう頑張<sup>がんば</sup>って磨いたなあ」って。「ここなん  
てめちやくちゃピカピカやないか」って。「ようやったな、これ固いとこ  
やで、これ。よっぽど磨いたんやなあ」言うて。「いやあ、ええもんやこ  
れ、キラキラしてるわ」言うて。「まあこれやったら安心やな」言うて。  
「えらかった、えらかった」って、喜んでもらえるようにね、親様にね。  
だって神様、みーんな一人一人のこと見てるわけですから。おかげは

みな平等に授けるんですから、それぞれに。受け物が悪いかどうかの問題です、そこから先はね。しっかりと受け物を頂けるように。おかげを頂けるように、受け物を良くしていかなとあきません。

ちっちゃい時やったらまだしも、それなりに大きくなって、信心することを見せてもらったら、どないでもできるはずですから。教えてくれなかったら難しいですけど、そやけど皆、このお話聞いている皆さんはもう、教えて頂いてるわけですよ、いっぱいね、毎日。だから必ずおかげを頂けますよ。

今日はそういう意味で、生と死についてお話をさしてもらっています。



命を授かるというのと、生きるというのと、死ぬというのと。

何のために？っていうことになってきますね。分かることもあれば、分からんこともあります。生も死もね。でも、分かることもたくさんあります。もうこの世に、今、肉体を分けて頂いて、たましいを分けて頂いて、何をせんといかんのか。信心せんといかんところです。

信心とは「神人」<sup>かみひと</sup>って書くんです。神様と人間と、あいよかけよです。

一緒に、共に、というのとやし。でも、先ほども言ったように、ほんとにね、神様の御心<sup>みこころ</sup>というものをよう分かって生きていく。それが分かっていくということが、一つの大事なゴールかもしれないね。まあそれが人生のゴールとまでは言いませんけれど、それを早う<sup>はや</sup>分かってくれた方<sup>ほう</sup>

が、残りの人生だって、また違う、いろんなことができますからね。

自分がおかげ頂いて幸せってというのは、これは、それで結構です。それが一つの大きな目的です。でも、どこかでそのおかげ頂いたら、人生で、そこから先はまた人を、今度助けるとか。そのお役に立たしてもらってことが大事です。何も人を助けるってというのは、私みたいにお結界けっかい座ってとか、そればかりじゃないです。

受けたおかげを人に話して、真まことの道を伝えていくってことは、それは誰でもできることですからね。でも、まずは自分がおかげ頂かんといかんことは多々ありますね。ま、そのために今日も一日、神様からドリルをそれぞれみんな、神様がもうほんとにね、よう考えて、人生のことも

考えて、カリキュラム考えて、今日のドリルをめいめい、別々に、一人一人、昇平くんは昇平くん用にとあって、準備して、用意して、出して下さってますから、それを今日一日、しっかりと解いてって下さい。

神様と、金光大神様と一緒にね。金光大神様の御取次、み教え、ご理解、

皆さん持ってるんですから。それを、聞いたものを心にかけてながら、起こってくる事柄を、向き合って、信心して、対処してって下さい。信心のドリルですからね。

そしたら、それを一日一日積み重ねていくとね、すごいおかげになってきますよ。そら、ものっすいおかげになってくると思うし。死ぬ時だって、「ただいま」言った時にそらね、そらあもうええ顔して、早うも

うお国替えさしてもろうた時に、神様にこの御霊みたま見てもらいたい、ってなるんちゃいますか。

ま、死ぬ時でもおかげを落とすこともありませんから、油断できませんけど。でも、ええお国替えさしてもろうたらね、「ほらもう、最高のもん持ってきました、神様ちよっと見てー！」「って。」「父ちゃん母ちゃん見て」言ったもんですよ。

神様に喜んでもらいましょ、ね。はい、どうぞ今日も一日、信心のお稽古けいこさして頂きましょう。よくお参りでした。

(了)



---

# 津田昇平教話 第七三話

令和三年三月十四日 朝の教話

令和四年四月六日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七―五

---

